Bull. Mukogawa Women's Univ. Humanities and Social Sci., **50**, 11–20(2002)
武庫川女子大紀要(人文・社会科学)

英語語彙における二重語——意味の差異化の側面から

安 達 一 美
(武庫川女子大学英語文化学科)

English Doublets—A Study of Differentiation in meanings

Adachi Kazumi

Department of English, School of Letters,
Mukogawa Women's University, Nishinomiya 663-8558, Japan

Abstract

The English vocabulary includes a large number of doublets, which are defined as the words that are cognates but are different in forms and/or in current meanings. Even though they were derived from the same origin, they often entered English via other languages which changed or modified not only their original forms but meanings. This paper aims to clarify how the doublets were differentiated in their meanings and to categorize them by the classification of change of meanings presented by Stephen Ullmann. It concludes that in English doublets the transfers of names through similarity between the senses are more than the ones through contiguity between them.

1 はじめに

他民族と接触を絶った社会の言語を除いて，言語はすべて混淆性を有している．しかし，英語のように本来語の2倍以上の借入語をもつ[1]言語は稀れである．英語は，さまざまな歴史的・文化的状況のもと，いずれの時代においても柔軟に外国語から語を借入し，混淆性の高い語彙を持つに至った。借入語のなかには，英語に取り入れられるまでの過程で，幾つかの言語を経由することによって，語の発音や形態を変えたり，原義にいろいろな意味を付け加えたり変化させたりしながら，英語にたどり着く語がある．したがって，英語の混淆性は，起源となる言語の多様性だけではなく，借入語が経由した言語で添加された文化の諸相を取り入れたため，より複雑に絡み合った重層性を形成することになった[2]．二重語はその有力な例証であるといえる．二重語とは，同じ語源の語が異なる時期や借入経路を経て二度以上にわたり借入された結果，異なる形態や意味をもつに至った一組の語である．英語はその二重語を最も豊かにもつ言語である．

英語語彙がどのように発展してきたかを調べることは，語が"both fossils in which the culture of the past is stored and vital organisms responsive to the pressures of the present"[3]であることを気づかせるとHughesは指摘している．一対の二重語がいろいろな文化を経由してどのように意味を添加したり転移させたりして英語に入ったか，また，英語においてどのように意味変化を経たのかを検証することは，二重語がいかに過去の文化接触の生き証人であるかを明らかにし，現代社会で息づく英語語彙の理解を深めることを可能にする．

そこで，本論文では英語語彙における二重語の意味の様態を明らかにするため，同一語源の語がどのような意味変化を経て英語に入って二重語になったのか，つまり，二重語の意味がどのように差異化していったかを検証する．語の意味が変化するというのは，元の意味が消滅するというよりも新しい意味が付け加わると考えるべきものであるし，また，変化は一度で終わるものではなく，繰り返し起こることもある．

二重語の意味の差異化を検討する場合には現在の意味をもって検討することもできるが，本論では二重語の意味が最初に分かれるに至った時点に焦点を当てて検証する．

分析にあたっては，Stephen Ullmann が *Semantics: An Introduction to the Science of Meaning* において提示した意味変化の分類を使用する．この分類は心理的次元における意味発展の分析を試みたものである．つまり，意味変化の原因は話者の心理的状態やその構造の永続的な特徴を持つものが多く，目に留まった偶然の類似性や心に浮かんだ連想が適切であると思ったとき意味を変化させて使用し，個人の使用から一般的使法へと進んでいくと，Ullmann は指摘している[4]．そして，意味変化の分類を言語的要因と非言語的要因にわけ，さらに言語的要因を連想(associations)に基づいて分類を試みた[5]．しかし，その意味変化の型の分類は，外国語からの借入語への配慮が足らないとの指摘もある[6]．そこで，同じ語源の語から幾度も借入された二重語の特質を考え，Ullmann の分類に語源の多義性と英語における用法の変化という二項を加えることにする．検証する二重語は，その二重語の大部分を占めるラテン語を起源とする二重語が 177 組 388 語，ギリシア語起源が 46 組 101 語，ゲルマン語起源が 73 組 148 語の計 296 組 637 語である．

2　意味変化の分類

意味変化の史的研究(Semasiology)は比較言語学が学問分野として地位を確かなものにした 19 世紀の初めに起こる．現代意味論の創造者でもあり sémantique という語を普及させた Michel Bréal が *Essai de sémantique* において，意味変化に関する心理的で因果論的な意味論を展開させて以来，意味変化の原因や分類に関するいろいろな試みがなされてきた．そして，意味の範囲の観点から意味の一般化(generalization of meaning)と特殊化(specialization)，また意味の価値の観点から向上(elevation)や下落(degeneration)などの意味変化の分類がなされた．しかし，Gustaf Stern は，このような論理的次元では，意味変化の結果を記述するのみで，変化の性質や条件・原因やその心理的な背景を明らかにするものではないと指摘し[7]、Ullmann もさらに歴史的，心理的，社会的意義の説明がないと批判した[8]．そして，Stern と Ullmann は，意味の心理的次元における分類を試みた．

Stern は，*Meaning and Change of Meaning with Special Reference to the English Language* において意味変化を「置換」(substitution)，「類推」(analogy)，「省略」(shortening)，「命名」(nomination)，「転移」(transfer)，「交替」(permutation)，「適応」(adequation)の 7 つに分類した．置換は外的・非言語的要因によって生じるもので，他の 6 つの型は言語的・心的要因から生じる変化である．そして，さらに，言語的要因によって生じる変化は，言語関係，指示関係，主観関係の改変の 3 つに分けることができる．言語関係の改変には類推と短縮が，指示関係には交替と適応が，また，主観関係には置換・命名・転移が起こるとした[9]．しかし，この Stern の意味変化の分類は，例えば，置換は適応を伴わないで起こることはないなどの同一の現象を二つの別の次元で分析しているともいえるとし，意味発展を包括することができる分類であるか疑問であると Waldron は批判した[10]．そして，Ullmann も統一性，等質性，論理的必然性の欠如を指摘している[11]．

Ullmann は修辞的型を踏まえて，意味の因果的型によって分類をおこなった．まず二つの大きな因果的範疇を「言語の保守性」(linguistic conservatism)と「言語の革新性」(linguistic innovation)にわけ，さらに言語の革新性を「名称の転移」(transfers of names)，「意義の転移」(transfers of senses)，「複合的な変化」(composite changes)にわける．そして，名称の転移と意義の転移の下位区分として「類似」(similarity)と「近接」(contiguity)による転移という種類に分けることができる．つまり，言語の革新性による意味変化は，「意義の類似(隠喩)」(similarity of senses [metaphor])による，「意義の近接(換喩)」(contiguity of senses [metonymy])による，「名称の類似(民間語源)」(similarity of names [popular etymology])による，「名称の近接(省略)」(contiguity of names [ellipsis])による意味変化と，それぞれ 4 区分が複合的におこるものを想定したことになる[12]．

意義の類似性は，古い意義と新しい意義の間にある類似点が転移を可能にする要素となる．この範疇に

は，人体の名称を無生物の現象に転用する擬人法的隠喩と，動物名が植物や無機質なものとか人間の気質に使用されたりする動物の隠喩，具体物を抽象的なものに転用する隠喩，ある感覚領域を表す語が別の感覚領域に転用される共感覚的隠喩などがある．

意義の近接は，何らかの関係に基づく連想による意味変化である．この範疇には，空間的・時間的関係に基づいた換喩による転移や，部分で全体を示す換喩，衣裳によって人間のタイプや社会階級を表す換喩，発明・発見をそれに関係した人名で表す換喩，容器によって内容を表す換喩，抽象語に具体的な意味を与える換喩，食物や飲み物をその生産地で表す換喩，原因の代わりに結果を述べたり結果の代わりに原因を述べる換喩などが含まれる．

名称の類似(民間語源)は，語源的には関係のない形態上に類似した語と結び付けられ形態とともに語義も変化するものである．名称の近接性は定句として用いられている二語のうち一方の語が全体の語義を表すようになるものであり，Stern の短縮に当たるものである．

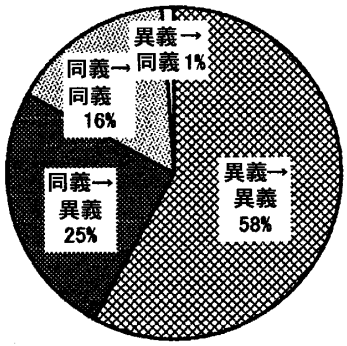
これら主要な四つの型が複合的に生じることがありえるので，さらに，「意義の類似と名称の類似」によるもの，「意義の類似と名称の近接」，「意義の近接と名称の類似」，「意義の近接と名称の近接」など四つの型が加えられている．

さらに，Ullmann は初期の意味論研究者による論理的分類に対しては前述したような欠陥があるとしながらも，意味変化の結果として，意味範囲の「拡大」(extension)や「縮小」(restriction)，また，意味評価の「悪化」(pejorative developments)と「向上」(ameliorative developments)を認めている．意味の拡大や縮小は社会的な要因によるものが多く，ある特定の社会グループでの使用が一般化したり，また，ある特定の社会グループで意味が特殊化したりするのである．評価の変化である悪化は婉曲表現，ある種の連想，人間の偏見などが原因として考えられる．また，向上は，悪化ほど多いものではないが，悪い意味とか不快な意味を持った語がその意味を弱くしていったり，意義間の単純な連想によって起こったりする．また，社会的な要因として社会的階層にそって向上したりすることがある．そこで，本論文では Ullmann による意味変化の分類によって二重語を分類し，さらに意味変化の結果としての意味範囲と意味評価の変化も検討してみる．

3　英語二重語の意味の差異化

二重語の中には，①借入時にすでに異なる意味で借入されてさらに差異化が進んだもの(略：異義→異義)，②同義語ないしは類義語として借入されるが意味の差異化が起こったもの(同義→異義)，③同義語ないしは類似語として借入され意味の差異化が起こっていないもの(同義→同義)，④借入時は異なる意味であったが同義語ないしは類義語となったもの(異義→同義)の4種類がある．二重語をこれら4種類に分けると，表1で示されるように，二重語のうち①は全体の58%(178組)，②は25%(76組)，③は16%(49組)，④は1%(3組)である．したがって，二重語の意味の差異化は全体の83%(254組)に生じたのである．これらを語源別に割合を出してみると，表2から表4が示すように，ラテン語起源の二重語の90%に差異化が生じ，ギリシア語起源は84%，ゲルマン起源が63%である．ギリシア語は，ルネッサンス期などの一部直接借入を除くと，ラテン語経由のものが多いので比率の傾向はラテン語に似ている．しかし，ゲルマン語起源の二重語は同義語で入り意味領域の増減はあっても同義語ないし類義語として差異化の生じてない二重語の比率が他の二重語に比べて多い[13]．

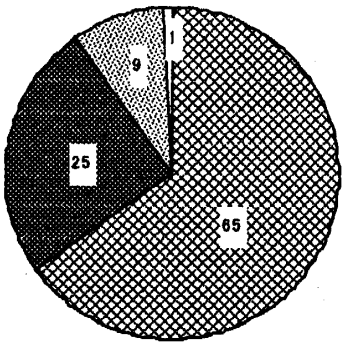
表 1. 二重語の意味の差異化



二重語の意味の差異化が生じたのは①と②の分類に入る二重語である．古英語を含む経由言語において意味変化が生じた語220語のうちフランス語(OF, MF, F, AF, ONF)が88語(39%)で一番多い．①と②に分類される二重語で，フランス語を経由した語が361語あり，そのうちの約1/4に意味変化が生じてい

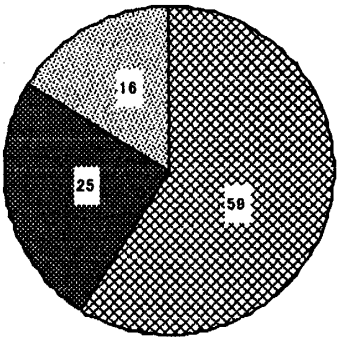
る．これは他の経由言語に比べ意味変化が多いことを示している．ラテン語においては，古典ラテン語から俗ラテン語，後期ラテン語，中世ラテン語に移行する間に意味変化した語が34語(16%)ある．フランス語以外のロマンス語は23語(10%)で，そのうちイタリア語が17語ある．借入時を含めて英語において意味変化が生じた語が71語(32%)である．

表2. ラテン語起源の差異化



これら，意味変化によって差異化の生じた二重語を，Ullmannの意味変化の型に語源の多義性と用法の変化を加えて分類すると表5になる．分類はそれぞれの意味変化の型別にするが，より詳細にみるため意義の類似性と意義の近接性に関しては二重語のうち一方の語が変化したものと二語ともが変化したものを区別して分類している．この表が示すように意味の差異化が生じた二重語のうち，意義の類似による意味変化に起因するものが41%，意義の近接によるものが26%，二重語のうち一方の語が意義の類似による意味変化と他方の語が意義の近接による意味変化の組合せが12%，名称の近接による語が6%，意義の類似と名称の近接が複合的に生じたもの1%，言語の保守性による意味変化が2%，語源の多義性による差異化が10%，英語における用法の変化によるものが2%であった．

表3. ギリシア語起源の差異化



また，語源別の分類は表6から表8に示されている．ラテン語起源とギリシア語起源がそれぞれ，意義の類似の方が意義の近接よりも約2倍多いのに比べ，ゲルマン語起源は同比率となっている．また，ゲルマン語起源は用法の変化による差異化を含む．また，ラテン語起源の二重語は語源の多義性による差異化が多い．

また，意味変化の結果，意味範囲で縮小が生じた語が136語，拡大が21語，意味の評価で悪化が生じた語が7語，向上が3語であり，意味の拡大よりも縮小が圧倒的に多く認められた．

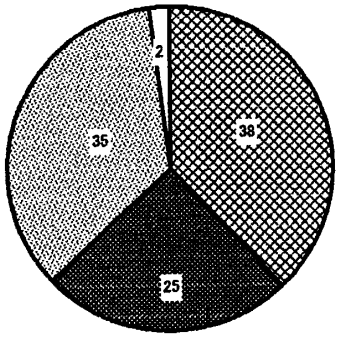
(1)意義の類似による意味変化で意味の差異化が生じた二重語

この型の二重語は109組である．うちラテン語起源が71組，ギリシア語起源21組，ゲルマン語起源17組である．経由言語における意味変化の結果として二重語の差異化につながったと思われる語は，フランス語37語，ラテン語16語，イタリア語4語，スペイン語2語がある．

i)二重語の一方が意義の類似による意味変化

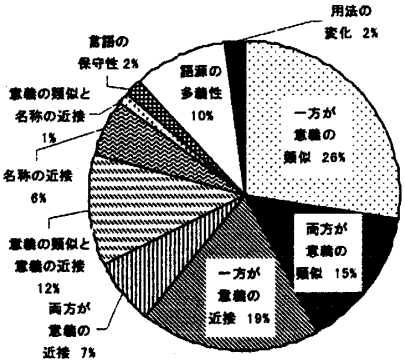
この区分の二重語は70組ある．そのうち異義→異義が53組，同義→異義が17組である．語源別にみると，ラテン語起源が45組，ギリシア語起源が13組，ゲルマン語起源が12組である．経路の組合せで多かったものは，一方がラテン語で一方がフランス語経由のものが30組で，いずれもフランス語を経由したものが23組である．この区分の二重語は，一方が語源の意味を保持して他方が経由言語または借入後に意味変化をしたものであるが，特に経由言語での意味変化が多い．union / onion がこの区分に入る．

表4. ゲルマン語起源の差異化



unionとonionは古典ラテン語で「一個，単一，結合」を意味する*uniō*の対格*uniōnem*に由来する．unionはこの語源の意味を保持した中フランス語*union*から「結合」の意味で英語に入る．その後，政治的な「連合」を意味するようになる．アメリカ合衆国は，南北戦争以前にはthe Unionと呼ばれていた．これは各州が自発的に結合したという言外の意味が含まれていた．しかし，南北戦争後は統一国家を意味するthe Nationのほうが一般的になった[14]．*uniō*は古典ラテン語期に「玉葱」の意味が加わった．これは農夫の用語で自ら栽培した玉葱を誇りにしてsingle large pearlと呼んだことに由来するとの説がある．onionは，このラテン語がフランス語

表 5. 意味変化の型による分類



oignon を経由して英語に入り，古英語にあった「玉葱」を意味するラテン語 *cēpa* 由来の *ynne* に取って代ったものである．

ii)二重語の両方が意義の類似による意味変化

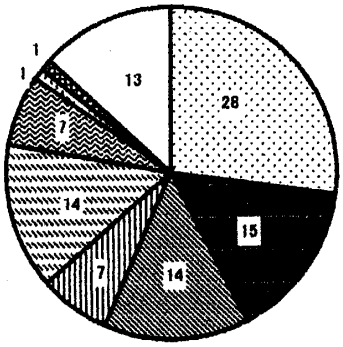
この区分の二重語は 39 組ある．そのうち異義→異義が 24 組，同義→異義が 15 組である．語源別にみると，ラテン語起源が 26 組，ギリシア語起源が 8 組，ゲルマン語起源が 5 組である．この区分の二重語の特徴は，意味変化の結果として意味の縮小化が生じたもの(22 語)が多い．この型の二重語として，cue / queue がある．

cue と queue は「尾」を意味する古典ラテン語 *cauda* に由来する．同じ意味で古フランス語 *cue* とフランス語 *queue* を経るが，英語には「獣の尾」の意味に縮小化されて 16 世紀末に入る．形の類似から「弁髪」「(順番を待つ)列」の意味へとさらに発展する．一方 cue はフランス語 *queue* の異形から英語に「弁髪」の意味で 18 世紀になって入り，「(玉突き)のキュー」の意味を付け加えることになる．

(2)意義の近接による意味変化で意味の差異化が生じた二重語

この型の二重語は 65 組あり，そのうちラテン語起源が 36 組，ギリシア語起源 12 組，ゲルマン語起源 17 組ある．経由言語における意味変化に起因よる差異化につながったと思われる語は，フランス語 18 語，ラテン語 7 語，イタリア語 4 語，スペイン語 2 語，アフリカーンス語 1 語である．

表 6. ラテン語起源の意味変化

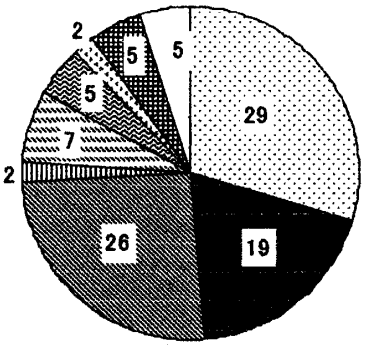


i)二重語の一方が意義の近接による意味変化

この区分の二重語は 48 組ある．そのうち異義→異義が 37 組，同義→異義が 11 組である．語源別にみると，ラテン語起源が 24 組，ギリシア語起源が 11 組，ゲルマン語起源が 13 組である．この区分の二重語は，語源の意味を保持して借入した語と経由言語または英語においての意味変化で差異化した組合せである．経路の組合せをみると，ラテン語対フランス語が多く，それに続いて 2 語ともフランス語経由，また，フランス語対イタリア語またはスペイン語がある．species / spice がこの区分に入る二重語である．

species と spice は，古典ラテン語 *speciēs*「種類」に由来する．spice は後期ラテン語の商業用語で特定の種類の品を指すようになり，古フランス語経由で 12 世紀に英語に入る頃には「東洋とか熱帯産の料理用香辛料」を意味するようになっていた．species は，直接借入であり 14 世紀末に語源の意味を保持して借入される．

表 7. ギリシア語起源の意味変化



ii)二重語の両方が意義の近接による意味変化

この区分の二重語は 17 組ある．そのうち異義での借入が 9 組，同義または類義での借入が 8 組である．語源別にみると，ラテン語起源が 12 組，ギリシア語起源が 1 組，ゲルマン語起源が 4 組である．daft / deft がこの型である．

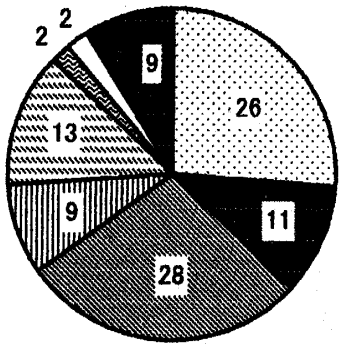
daft と deft は共時的意味がかけ離れた二重語のひとつである．語源はゲルマン祖語の **dab-* で「適切な」という意味で古英語に入る．古英語においては，適切に行動する人はでしゃばることなく柔和であるという連想から，「温和な，優しい」の意味となる．daft はさらに，「無垢な」から「理性のない(動物)」，「愚かな(人間)」と悪化の意味変化をしていく．一方 deft は，「適切に(行為する)」から「適切に(仕事をする)」へ，そして，「器用な」「手際がよい」の意味へと変化していく．

(3)二重語の一方が意義の類似で，他方が意義の近接による意味変化で意味の差異化が生じた二重語

この型の二重語は30組ある．そのうち異義→異義が17組，同義→異義が13組である．語源別にみると，ラテン語起源が24組，ギリシア語起源が3組，ゲルマン語起源が3組である．いずれの起源の二重語でも古フランス語を初めとするフランス語経由が大変多い．

この型の二重語の例としては，cloak / clock がある．cloak と clock の語源は古典ラテン語の *clocca* で「鐘」を意味した．古フランス語で「鐘」のほかに形の類似から「外套」の意味が生じた．cloak はこの古フランス語から13世紀後半に英語に取り入れられた．一方 clock は，古フランス語から中期オランダ語に入り「鐘」の他に「(鐘の鳴る)時計」の意味が加わり，この中期オランダ語から「時計」の意味で14世紀の後半に英語に入る．

表 8. ゲルマン語起源の意味変化



(4)名称の近接による意味変化で意味の差異化が生じた二重語

この型の二重語は15組ある．異義→異義が14組，同義→異義が1組である．語源別にみると，ラテン語起源が12組，ギリシア語起源が2組，ゲルマン語起源が1組である．この型の意味変化は経由言語で起こったものがほとんどである．chief / chef / cape がこの型に入る．この三重語の語源は古典ラテン語の *caput*「頭，主要，首領」で，chief は俗ラテン語と古フランス語を経て，語源の意味で14世紀前半に借入した．cape は14世紀後半にイタリア語とフランス語を経て「半島の頭」という類似で「岬」の意味となり英語に入る．chef が名称の近接を経る．フランス語において *chef de cuisine* からの短縮で chef が「料理長」の意味を持つようになり19世紀に英語に取り入れられた．

(5)二重語の一方が意義の近接と名称の近接による複合の意味変化で意味の差異化が生じた二重語

この型の二重語は2組ある．異義→異義のみである．語源別にみるとラテン語起源とギリシア語起源であり，古フランス語などのフランス語経由である．例として pupa / puppy がある．この二重語は古典ラテン語の *pūpa*「少女，人形」に由来する．puppy に名称と意義の近接が生じた．「人形」の意味を持ったこのラテン語が中フランス語に入り，人形＝玩具の連想から「玩具の犬」の意味が生じ，「玩具」が省略されて「愛玩用の小型犬」となる．puppy はこの中フランス語から15世紀に借入される．pupa は新ラテン語で「さなぎ」の意味が加わり19世紀に英語に取り入れられる．

(6)言語の保守主義による意味変化のため意味の差異化が生じた二重語

この型の二重語は4組ある．異義→異義と同義→異義がそれぞれ2組ある．語源別にみると，ラテン語起源が2組，ギリシア語起源が2組である．plum / prune がこの型に属する．この二重語の語源はギリシア語 *προύμνον*「プラム」で，plum は古典ラテン語から古英語にこの意味で入る．一方の prune は，古フランス語で「干したプラム」を意味するようになり，これが14世紀に英語に入った．

(7)語源のもつ多義性のため意味の差異化が生じた二重語

この型の二重語は25組ある．異義→異義が20組，同義→異義が5組である．語源別にみると，ラテン語起源が22組，ギリシア語起源が2組，ゲルマン語起源が1組である．経路の組合せをみると，ラテン語対古フランス語と，両方の語がラテン語からの直接借入である．この型の二重語に comprehend / comprise がある．これは古典ラテン語 *comprehendere* に由来する．この語は基本的には「掴む」という意味であるが，古典ラテン語で意義の類似や近接の意味変化で意味領域が広がっており，「(精神的に)認める，悟る」の意味もあった．comprise はフランス語を経て「掴む」の意味で15世紀に借入され，comprehend は後者の意味で16世紀に取り入れられた．

(8)用法の変化のため意味の差異化が生じた二重語

この型の二重語は8組ある．語源別にはすべてゲルマン語起源である．同一語が，古英語において強調形とか用法の変化で分化したものである．この例としてof / offがある．もとは同一語であったが，15世紀初めごろから強形のoffが副詞や語源的意味の強い前置詞として用いられるようになり，17世紀以降分化が定着した．

4 おわりに

ラテン語を起源とする英語の二重語のうち90%に意味の差異化が生じている．ラテン語を経て英語に入ることの多かったギリシア語起源の二重語もラテン語起源のものに類似し，ギリシア語起源の二重語の84%が差異化している．しかし，ゲルマン語起源では63%が差異化され，1/3の二重語が同義語ないしは類義語として使われている．これは経由言語における意味の変化を見ても，イタリック系の言語(特に古フランス語)での意味変化が非常に多いのに比べ，ゲルマン語系では，古北欧語が2語，オランダ語4語，ドイツ語1語とわずかであることに呼応している．この事実の意味は歴史的，文化的，社会言語学的側面などからも興味深い．しかし，今回の二重語だけのデータからそれを論じるころは不十分すぎるので，議論の場を改めることにする．

意味変化の分類で見ると，意義の類似による変化での差異化は全体の2/5あり，意義の近接が全体の約1/4である．意義の類似が意義の近接の1.6倍多いことになる．語源別に見ると，ラテン語起源とギリシア語起源がそれぞれ，意義の類似の方が意義の近接よりも2倍前後多いのに比べ，ゲルマン語起源は同比率となっている．また，ゲルマン語起源の二重語は，他の起源の二重語と異なり用法の変化による差異化を含む．また，ラテン語起源の場合は語源となった語の多義性による差異化が他の起源よりも多い．意味変化の結果を見ると，縮小化のほうが拡大化よりも約6倍多く，同語源をもつ二重語の意味が差異化するとき意味が縮小化されるほうが多いことがわかる．

意味が変化していくにはいくつかの原因が考えられる．Ullmannは，Millettetが提案した三つの原因(言語的原因，歴史的原因，社会的原因)に，さらに三つを付け加えた。つまり，話者の心の深層に根ざした特徴や傾向から意味が変化するという心理的原因，新しい概念や物質などを名づけるとき借入や新語によらず古い語の意味を変えて用いるという新しい名称に対する必要性，そして外国語の影響である[15]．英語のように借入語を寛容に受け入れる言語にとって外国語の影響は避けがたいものであり，この観点を無視しては英語の語彙の全体像を見失うことになる．借入された語が意味変化をするとき，原義や経由言語での意味変化に影響を受けてさらに意味を変化させることが少なくないからである．頻繁に借入を重ねた結果生じた二重語にその姿を見ることができる．

意味変化する場合は何らかの有契的な関係がある場合が多い．二重語となっている一組の語は同一語源に由来した語であるから，核となる意味を共有している．二重語の有契性は，それぞれの語義の根底にある原義が定点となっている．意味の変化というものは一度で終わるとは限りない．繰り返し変化を続けていくうちに原義からは大いに離れて，共時的には有契性が見出せないこともある．しかし，そのような変化を経た二重語の通時的な有契性の痕跡をたどっていくと，原義との関連性を認めることができる．そのような痕跡を二重語に求めることは，まさしく「語彙の遍歴路」を明らかにすることであり，それは英語語彙の背景にある英語文化を探ることである．

インターネットによって世界が結ばれる今日の社会にあって，英語を駆使できることが絶対条件として求められるようになり，今やLinguistic divideが問題となりつつある．外国語学習には語彙習得は必須のものであるが，それは単語の日本語訳を覚えて語彙数を増やすだけでは決して十分とはいえない．語のもつ意味の深さや領域，語法などの理解が必要となる．二重語についての通時的･共時的な知識は，英語学習者が語彙の理解を深めることによって適切な語彙を選択するときの有効な助けとなりえる．

引用文献

1)Scheler, Manfred. *Der englische Wortschatz*. Berlin; Verlag. 1977.『英語語彙の歴史と構造』(大泉昭夫訳) 東京: 南雲堂 1990, p.93.
2)安達一美 「英語語彙における二重語—時代背景からの考察」『武庫川女子大学紀要(人文・社会科学編)49』 2001, pp.11-20.
3)Hughes, Geoffrey. *A History of English Words*. Oxford: Blackwell, 2000, p.1.
4)Ullmann, Stephen *Semantics:An Introduction to the Science of Meaning*. Oxford: Basil Blackwell, 1970, p.201.
5)同上. p.211.
6)三輪伸春『英語の語彙史』 東京: 南雲堂, 1995, p.130.
7)Stern, Gustaf. *Meaning and Change of Meaning with Special Reference to the English Language*. Bloomington:Indiana UP, 1968, p.5.
8)Ullmann, Stephen. *The Principles of Semantics*. Oxford: Basil Blackwell, 1967, p.205.
9)前掲, Stern. p.169.
10)Waldron, R.A. *Sense and Sense Development*. London: Andre Deutsch, 1967, p.134.
11)前掲, Ullmann(1967), p.249.
12)前掲, Ullmann(1970), pp.212-27.
13)詳しい分析結果は添付資料参照のこと.
14)Bryson, Bill. *Made in Ameirca－An Informal History of the English Language in the United States*. NY: Avon, p.80.
15)前掲, Ullmann(1970), pp.200-10.

分析資料

1)意味の差異化が生じた二重語

① 意義の類似による意味変化で意味の差異化が生じた二重語

i)二重語の一方が意義の類似による意味変化

[異義→異義][L]advance(保)/avaunt(類), cancer(類/縮)/canker(保), castle(保)/chateau(類/縮), capital(保)/(cattle(類/縮)/chattel(LL 保)), chapeau(保)/chapel(類), common(保)/commune(類), continence(保)/countenance(類/拡 OF), crate(保)/grate(類), dainty(類)/ dignity(保), degrade(保)/degree(類/縮), devote(類)/devout(保), direct(保)/dress(類), distract(類)/ distrait(保), engin(類)/gin(保), expand(保)/spawn(類/縮 AF), fate(保)/fay(類), feeble(保)/ foible(類), mass(保)/mess(類/拡 OF), naive(類)/native(保), neat(類)/ nitid(保), pace(保)/pass(類), papa(保)/pope(類/縮 LL), pauper(類)/poor(保), par(保)/ pair(類/縮 OF)/peer(OF 保), pestle(類/縮 F)/ pistil(保), polish(保)/polite(類), preach(類/縮 LL)/predicate(保), private(保)/ privy(類), prolong(保)/purloin(類/悪), ravine(類/縮 F)/(rapine(保)/ ravin(保)), repair(類/拡)/repatriate(保), replica(類/縮 It)/reply(保), retract(保)/retreat(類), senior(保)/sire(類), supervise(保)/survey(類/拡), onion(類)/ union(保) transverse(保)/traverse(類/縮 OF), **[Gk]** barge(類/縮 OF)/bark [barque](保), blaspheme(保)/blame(類/拡 VL), cope(類)/coup(保), dactyl(保)/date(類/縮 OF), pause(保)/pose(類), pain(保)/pine(類/縮 ML), poesy(保)/posy(類), sponge(保)/ spunk(類), triumph(OF 保)/trump(類/縮)**[Gmc]** bleach(保)/bleak(類), bosket(保)/ bouquet(類/縮), garden(類/縮 OF)/yard(保), guise(類/縮 OF)/wise(保), stick(保)/stitch(類), stint(類)/stunt(保), warble(類)/whirl(保) **[同義→異義][L]**cattle(類/縮)/chattel(LL 保)/capital(LL 保), cope(類/縮)/cape(保), drake(類)/dragon(保), emend(類/縮)/amend(保), fact(類/悪拡)/ feat(保), hospital(保)/hostel(類/縮)/(hotel(近)), madam(保)/Madonna(類/

縮), particle(類/縮)/parcel(保), portico(保)/porch(類/縮), strict(保)/strait(類) [**Gk**]antiphon(保)/anthem(類/拡), crypt(類/縮)/grot(保)/ grotto(保), tone(保)/tune(類) [**Gmc**] deal(保)/dole(類似/縮), guard(保)/ward(類/縮), hale(保)/whole(類), raise(保)/rear(類), spider(保)/spinner(類), straight(保)/stretch(類)

ii)二重語の両方が意義の類似による意味変化

[**異義→異義**] [**L**]alloy(類似縮 OF)/ally(類/縮), armada(類/縮)/army(類/縮 Sp), cadence(類/縮 It)/chance(類/縮 VL), case(類/縮 F)/cash(類/縮 F)/chase(類/縮 F), conduct(類)/conduit(類), costume(類/縮 It)/consuetude(保)/ custom(類/縮), coil(類/縮)/collect(保)/ cull(類/縮), cue(類/縮)/queue(類/縮), foil(類)/folio(類), ensign(類)/insignia(類), mosquito(類/縮 Sp)/musket(類), race(類/縮 OF)/radish(類/縮)/radix(保), rouge(類)/ruby(類/縮 ML), tense(保)/tent(類/縮 VL)/toise(類/縮 LL), tinsel(類/縮 OF)/ scintilla(保)/stencil(類/縮 OF), tract(類/縮)/trait(類/縮 OF) [**Gk**]chair(類/拡悪)/cathedra(保)/ chaise(類/縮), corona(類/縮 OF)/ crown(類/縮), dais(近/縮 ML)/ desk(類/縮 ML)/discus(類/縮 L)/ dish(類)/disk(類), place(保)/(piazza(類/縮 L)/plaza(類)), scandal(類/縮)/slander(類) [**Gmc**]bellows(類/縮)/belly(類/縮), chuck(類)/ shock(類), staff(類/縮)/stave(類/縮)

[**同義→異義**] [**L**]canal(類/縮)/channel(類/縮), cant(類/縮)/chant(類/縮), canzone(類/縮)/ chanson(類/縮), cavalry(類/縮)/chivalry(類), convey(類/拡)/convoy(類/縮), fan(類/拡)/van(類/縮), ministry(類/縮)/mystery(類/拡), pole(類/拡)/pale(類/縮), propriety(類/縮)/property(類/縮), pungent(類/縮)/poignant(類/拡) [**Gk**]coffer(類/向)/coffin(類/縮), piazza(類)/plaza(類)/(place(保)) [**Gmc**] guardian(類/縮)/warden(類/縮), snack(類/縮)/snatch(類/悪)

②意義の近接による意味変化で意味の差異化が生じた二重語

i)二重語の一方が意義の類似による意味変化

[**異義→異義**] [**L**]aptitude(保)/attitude(近/縮 It), calender(近/縮 OF)/cylinder(保), caste(近/縮 Port)/chaste(保), clause(近/縮 ML)/ close(保), complement(保)/ compliment(近), dominion(保)/dungeon(近/縮 ML), explicit(保)/exploit(近), intricate(保)/ intrigue(近/悪 It), liberate(保)/livery(近), major(保)/mayor(近/縮), manoeuvre(保)/manure(近), page(保)/pageant(近), probe(近)/prove(保), prosecute(保)/pursue(近/拡悪), protract(保)/portray(近/縮 OF), ransom(近/縮 OF)/redemption(保), relax(保)/release(近), species(保)/spice(近/縮 OF), source(近)/ surge(保), term(近/縮 OF)/terminus(保) [**Gk**]air(保)/ aria(近/縮 It), athanasy(保)/tansy(近), choir, quire(近/縮 OF)/chorus(保), dauphin(近/縮 OF)/dolphin(保), nausea(保)/ noise(近/悪 OF), paper(近/拡 L)/papyrus(保), presbyter(保)/priest(近/拡) [**Gmc**]boulevard(近/縮 OF)/ embankment(保), bruin(近)/brown(保), etiquette(近)/ticket(保), furnish(保)/veneer(近/縮 G), heathen(保)/hoyden(近/縮), paddock(保)/ park(近/縮 OF), scuffle(保)/shove(近), sham(近)/shame(保), shirt(保)/skirt(近/縮 ON), track(保)/trek(近/縮 Afk) [**同義→異義**] [**L**]amicable(OF 保)/amiable(近/縮), champaign(保)/campaign(近/縮)/(campus(類/縮)/camp(類/拡)), complete(保)/ comply(近), secure(保)/sure(近), task(近/拡)/tax(保) [**Gk**]choler(近/縮)/cholera(保), minster(近/縮)/monastery(保), treacle(近/縮)/theriac(保) [**Gmc**]gnaw(保)/nag(近), outer(保)/utter(近/縮), pound(保)/pond(近/縮), scatter(近)/shatter(保)

ii)二重語の両方が意義の類似による意味変化

[**異義→異義**] [**L**]annoy(近)/ennui(近), dado(近)/date(名近)/datum(保)/die(近), estate(近/縮)/state(近/縮)/status(保), gentile(保)/(genteel(保)/gentle(近/拡)/jaunty(近)), lance(近/縮 OF)/launch(近/拡 OF), legal(保)/(leal(近)/loyal(近)), premier(近)/primer(保)/ primero(近) [**Gk**]parson(近/縮 VL)/person(近/拡 VL) [**Gmc**]lair(近/縮 Du)/leaguer(近/縮) [**同義→異義**] [**L**]esquire(近/拡)/squire(近/縮), gentle(近/拡)/genteel(OF 保)/jaunty(近/拡)/(gentile(保)), spirit(近/縮)/sprite(近/縮), suit(近/縮)/suite(近/縮) [**Gmc**]daft(近/縮悪)/deft(近/縮), raid(近/縮)/road(近/拡)

③二重語の各語が意義の類似と意義の近接による意味変化で意味の差異化が生じた二重語
[異義→異義][**L**]advocate(類)/avow(近/縮 OF)，camp(類/縮)/campaign(近/縮)/(champaign(保)/campus(類/縮))，cark(近)/(cargo(保)/charge(類/縮))，cloak(類/縮 OF)/clock(近)，cross(保)/cruise(類/縮)/crux(名近)，due(近)/debit(類)/debt(類)，design(近/縮 F)/designate(類/縮)，farm(近/縮 ML)/firm(類/縮 It)，motif(近/縮 OF)/motive(類)，pennon(類)/pinion(近/縮 OF)，piano(近/縮 It)/plain(類/縮)/plan(類/縮 F)/ plane(保)，plumb(近)/ plunge(類/拡)[**Gk**]barbarous(類)/Barbary(近)/brave(近)/bravo(近)，card(近/縮 It)/ chart(類/拡)[**Gmc**]bank[1](類)/ bank[2](近)/bank[3](類)/ bench(保)，lobby(近/縮 OF)/lodge(類/縮 ML)，haranque(類/縮 It)/ranch(近/縮 Sp)/ range(近/縮 OF)/rank(近/縮 MF)/ring(保)/rink(類/縮 OF)　**[同義→異義]**[**L**]aim(類/縮)/esteem(保)/estimate(近/向)，cargo(保)/charge(近/縮)/(cark(類))，foil(近/悪)/full(類/縮)，found(近/縮)/fuse(類/縮)，purpose(近/縮)/propose(類/縮)，sect(類/拡)/set(近/縮)[**Gk**]history(類/縮)/story[1](保)/story[2](近)

④名称の近接による意味変化で意味の差異化が生じた二重語
[異義→異義][L]cape(類/縮 Prov)/chef(名近)/chief(保)，coy(類/縮)/quiet(保)/quietus(名近)/quit(名近)，cross(保)/cruise(類/縮)/crux(名近)，dado(近/縮 It)/date(名近)/datum(保)/die(近/縮 VL)，deliberate(保)/deliver(名近)，hotel(名近/縮)/(hospital(保)/hostel(類/縮))，influence(保)/ influenza(名近/縮 It)，geneva(gin)(名近)/juniper(保)，maxim(名近)/maximum(保)，mob(名近)/ mobile(保)，rout(保)/route(名近)，real(名近)/(regal(保)/royal(保持))[**Gk**]terebinth(保)/turpentine(名近)[**Gmc**]attach(近)/attack(名近)　**[同義→異義]**[**Gk**]camera(名近/縮)/chamber(保)

⑤二重語の拡方が内容の近接と名称の近接による複合の意味変化で意味の差異化が生じた二重語
[異義→異義][**L**]thesaurus(意名近)/treasure(保)，pupa(保)/puppy(意名近/縮 OF)

⑥言語の保守主義による意味変化のため意味の差異化が生じた二重語
[異義→異義][**Gk**]plum(保)/prune(言外要)，asphodel(保)/daffodil(言外要)　**[同義→異義]**[**L**]feud(保)/fee(言外要)，sergeant(言外要)/servant(保)

⑦語源のもつ多義性のため意味の差異化が生じた二重語
[異義→異義][**L**]aggravate/aggrieve, arc/arch, catch/chase, comprehend/comprise, employ(類)/implicate /imply, faction/ fashion, illuminate/limn, inch/ounce, invite/vie, lobster/locust, memoir(類)/memory, rail/ rule, momentum/ moment, radius/ray, ratio/ration(類)/reason, respect/respite, treason/tradition, vocal/ vowel [**Greek**]adamant/diamond, jealous/zealous　**[同義→異義]**[**L**]construe/construct, deposit/depot, mint/money, piety/pity [**Gmc**]wight/whit,

⑧用法の変化のため意味の差異化が生じた二重語
[同義→異義][**Gmc**]as/also(用変)，of/off(用変)，then/than(用変)，through/thorough(用変)，to/too(用変)

[略語]
(類)＝意義の類似，(近)＝意義の近接，(名近)＝名称の近接，(意名近)＝意義の近接と名称の近接の複合，(保)語源意味保持，(言外要)＝言語外要因，用変＝用法の変化，(縮)＝縮小，(拡)＝拡大，(向)＝向上，(悪)＝ 悪化，AF＝Anglo-French，F＝French，G＝German，Gmc＝Germanic，Gk＝Greek，It＝Italian，L＝Latin，LL＝Late Latin，MF＝Medieval French，ML＝Medieval Latin，OF＝Old French，ONF＝Old North French，Sp＝Spanish，VL＝Vulgar Latin